

研究は楽しいからできるもの!

●浦高同窓会・講演会 その1

昨日の浦高同窓会総会後の講演会は、東京外国語大学教授の**峰岸真琴氏(高27)**による「浦高生を『無教養なグローバル人材』にしないために」でした。いつものようにメモ書きを頼りに綴りましょう。

* *

◆プロフィール

峰岸 真琴(みねぎし まこと、1956年12月 -)は日本の言語学者。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授、副所長(兼務)。言語学、言語基礎論、言語類型論が専門。文部科学省グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」の事業推進者(拠点リーダー)。



- ・1975年3月 - 埼玉県立浦和高等学校卒業
- ・1979年3月 - 東京大学文学部卒業
- ・1986年4月 - 東京大学文学部 助手
- ・1987年4月 - 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助手
- ・1992年11月 - 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教授
- ・2002年4月 - 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 教授

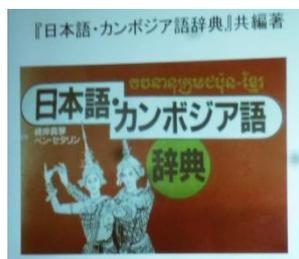
* *

◆言語学調査と文字情報処理

自己紹介を兼ねまして、私のやっている研究について簡単にご紹介いたします。私は、親からは将来潰しがきく法学部を目指すように言われたのですが、どうしても言語学を研究したくて、東大文学部に入りました。そして、東大を卒業して最初に取り組んだのがタイ留学でした。

タイ留学は1982~83年で、留学しながらカンボジア語の方言や山地民の民俗語を調査しました。調査というのは、その土地の人々の暮らしや会話を聞きながら記録するものです。どのような内容の話をしているのか、その時にはどのような言葉を使っているのかというものを書き取っていく作業です。その後、東京外国語大学のアジア・アフリカ(通称・AA)言語文化研究所に異動し、東南アジアの言語の研究を行っています。

そうした地域の方々への恩返しとして『カンボジア人のための日本語 カンボジア語辞典』を現地の研究者との共著で1991年に刊行しました。



その後、インド東部、中国南部の少数民族の言語調査、インド系文字処理システムの開発研究、タイ語話しことばの分析などを行い現在に至っています。実際に私が訪れた場所をいくつかご紹介します。

* *

◆タイ国カンチャナブリー県

ここはタイとミャンマーの国境地帯にあり、アユタヤ王朝時代、ビルマ軍がタイに進入してくる際は、ビルマ軍の通過点でありました。クウェー川に架かる橋は映画『戦場にかける橋』で有名で、旧日本軍が多数の犠牲者を出したとんでもない早さで作られた泰緬鉄道の一部は現在でも使われています。しかし、私が訪れたのは県庁からジープで100kmのジャングルの中で、現地のレンジャーと一緒に暮らしました。



この写真は、水遊びをしている子ども達です。水は透明で澄んでいるのですが、これが飲み水であり、体を洗う水でもあります。そう水遊びで

はなく、水遊びをしないと生きていけないのです。ただ素晴らしいのは夜になると無数のホテルに出会えたことです。

* *

◆インド・ジャールカンド州

こちらは、インド中部の州です。オーストロアジア語の調査で行きました。カルカッタ、デリーから車で1晩、さらに車で数時間から1日かかる場所です。



州までは車が走っている所ですが、観光で行く人はおりません。左は村の祭りの様子です。女性たちの踊りはフォークダンスのような感じです。



〔サルタン語、ムンダ語〕



〔ムンダ人の踊り〕

ここは安全な所ですが、行き方を誤ると矢が飛んでくると脅かされました。



〔ライスビールを飲む女性〕

インドの原住民の人たちの集落ですので、カースト制度の外にあります。その証拠がムンダのライスビールを飲む女性の写真です。インドでは基本的には酒を飲むことができません。

* *

◆東北インド・メガラヤ州

次は、インドの東北部、バングラデシュとの国境地域にあるアッサム地方のメガラヤ州です。州名はヒンディー語、サンスクリット語の「雲のすみか」に由来するもので、州内のチェラプンジは世界で最も年間降水量が多いことで知られています。その理由は、ほぼ全域が標高1,000m以上の土地なので、ここではカシ語を調査しました。



〔女性が物売りをしている〕

カルカッタ、デリーから飛行機でグワハティへ飛び、さらにバスで4時間かかります。カングラ宮殿の跡があるインパールの近傍です。インド人でもなかなか行かないような場所です。

この写真もインドでは珍しい光景です。なぜならば、インドでは男性が商売をし、女性は商売をしません。ここもカースト制度外の土地なので、こうした光景が見られるのですね。

* *

◆中国・貴州省

最後は中国の貴州省です。上海から飛行機で貴州省の州都・貴陽へ行き車で移動します。省域は、雲貴高原と呼ばれる平均標高1,000m程度の起伏に富んだ高原になっています。北側は四川盆地に高度を下げ、烏江が流れ出して重慶の涪陵で長江に注いでいます。南側は雲南省から流れる紅水河の上流域となっており、貴陽、安順などのある省中央部は2つの河川の分水嶺になっています。ここではタイ系水族の調査で行きました。定期市と歌垣の様子、調査の様子です。



〔定期市と歌垣〕



〔調査の様子〕

ここでは、ミャオ族の秦(ダイ)語、侗(トン)語を調査しました。調査というのは、聞き取り調査でして発音や話し方を綴っていきます。今はICレコーダーがありますが、当時はソニーのテープレコーダーでした。

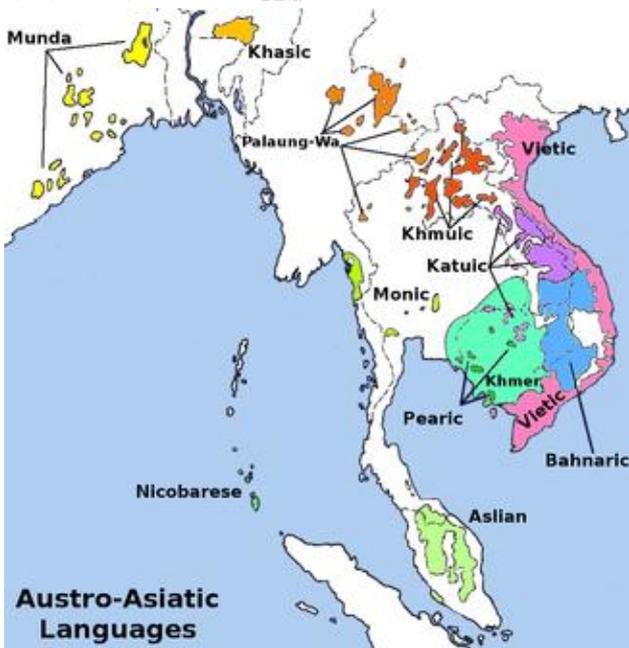
◆なぜあちこちへと調査に行くのか？

アジアの言語を調査するというのは、ご覧いただいたように山岳地帯や僻地の少数民族を訪ねるものです。私は元来、出無精で旅行もしない質ですが、他人が行かないアジアの各地に行って調査をしてきました。なぜなのか・と言われると、**第一に学術的探求心です。調査が楽しいのです。**既に誰かが解明したのではなく、発音も不明、文法書も辞書もない言語に出会うと、言語学者の血が騒ぐのです。

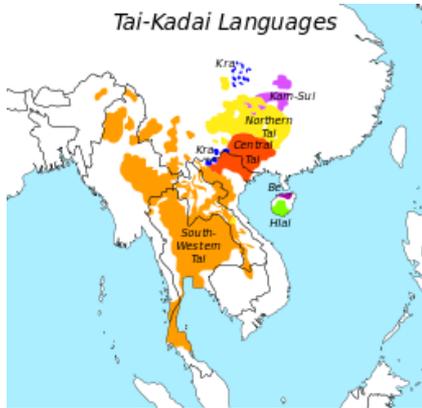
私は他人から何かを習うというのは苦手であり、まったく知られていない言語の謎を解くのが言語学者としての夢なのです。アジアの各地は、西洋人、西洋論理と異なる、独自の観点から見るができます。実は現地の人たちもわからないことがあり、それを解明する楽しみがあるのです。

* *

◆オーストロアジア語族



これらの地域の言葉は、オーストロアジア語族と呼ばれる語族なのです。ベトナム語やクメール語、モン語なども含めることができます。言語数は160余り、総人口で2億人を超えます。サンスクリットなどにも影響を与えています。



◆タイ・カダイ語族

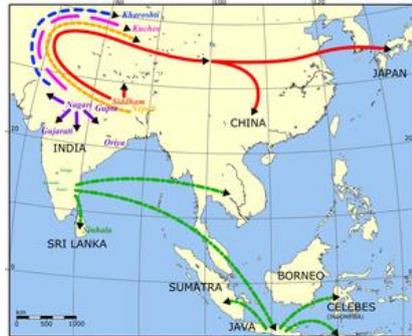
こちらは、タイ語、ラオス語を含む、タイ・カダイ語族の分布です。タイ、ラオス、ベトナム、ミャンマー、中国、アッサムまで分布してい

ます。

* *

◆インド系文字の伝播

この図は、インド系文字（ブラーフミー文字）が南アジア、東南アジアへ伝播していく様子です。



◆フィールドワークの流れ

1. 事前の調査準備
2. 調査先の情報収集（特に滞在先の確保）
3. 現地とつながりをつける
4. 到着後の移動手段の確保
5. 聞き取り調査
6. 結果の整理・データ化・出版
7. 現地との信頼関係の維持
8. 調査 ≒ RPG の実体験版？

といった順になりますが、大切なのが2から4です。まだほとんどの人が行ったことのない場所へ行く訳ですから、事前準備がしっかりできないと目的は達成できません。さらに帰って来ても、辞書で残すことなど、現地の研究者にとってのメリットも大切に信頼関係の維持に努めています。調査は、病気、交通事故、クーデターなど現地の変化に合わせて危機管理しなくてはなりませんので、まさにゼルダの冒険のようなRPGの実体験版と言えます。

* *

◆現地留学と調査の経験から

グローバル社会の中で活躍する浦高生や若い人たちに伝えたいことは

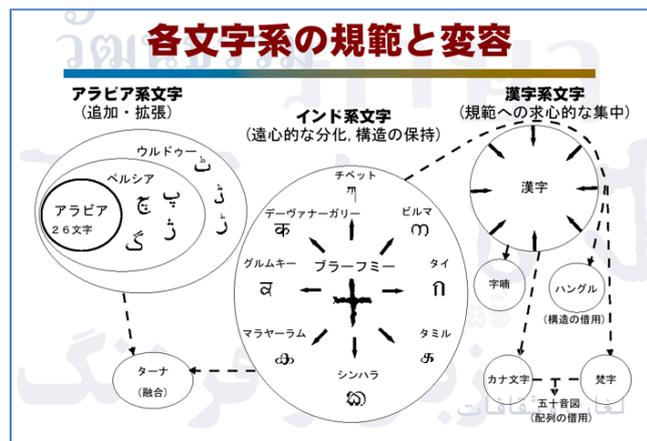
1. 東南アジア、インドの人々を師匠、上司、同僚として「下から」観察しなさい。
2. 違いを見出す「観察力」と、違いを克服する「コミュニケーション力」を持ちなさい。
3. 現地で生き残る知恵、問題を解決するには「現場での行動力」が大切です。

東南アジアやインドでは、研究してやる調査しているという上から目線では全く相手にされません。文化や歴史を学ばせていただく、教えていただくという「下から目線」が大切です。言葉や文化など、さまざまな部分での違いを見出す観察力、さらに違いを理解し克服するコミュニケーション能力が大切です。そして、健康で無事に帰ってきてまとめなければなりませんので、現地では生き残る知恵が重要です。

では、どうやって現地にアクセスするか？です。

- (1) 公用旅券を取得する。
- (2) 一般旅券で研究ビザを取得する。
- (3) 一般旅券で観光ビザを取得する。
- (4) 現地での協力者に招いてもらう。
- (5) こっそり潜入する。

正解は(4)の招待されることがベストです。しかし、最初の頃は信頼関係もありませんので、(3)の観光ビザで入国するのは。(1)の公用ビザは手続きや制約が多くて大変です。また、行きたい場所が公用で入って行くような場所ではないので、地域に入るのにも時間がかかり、手続きが大変です。研究ビザはスパイと間違えられることもあります。こっそり潜入は、後続の人にも迷惑がかかります。 <つづく>



次の図は、アラビア文字、インド系文字、漢字系文字の規範と変容です。それぞれが各地に伝播して

地域文化とともに変容していく様子です。
 例え、サンスクリット語の「食べ物、食事」は表記は変わっても、「アハラ」というような形で伝播しています。

文化的な交流の例：サンスクリットからの各言語への借用語「食べ物、食事」

- ・サンスクリット(梵)語 'food' 食事 [SK.]
- ・ヒンディー語 आहार āhāra
- ・ベンガル語 আহাৰ āhāra
- ・カンナダ語 ಆಹಾರ āhāra [e:he:re] n.
- ・タイ語 อาหาร [aahaan] 食事, 料理

私は、現地の研究者と一緒に調査を行い、共著で論文を書き、辞書作りなどで恩返ししてきました。前述の『カンボジア人のための日本語 カンボジア語辞典』や文字印字システム開発もそうです。 * *

